

生産コスト等への対応(早期出荷への取組)

- 適度な脂肪交雑で値頃感のある牛肉の低コスト生産に向けて、肥育開始月齢の早期化や肥育期間の短縮による出荷月齢の早期化(早期出荷)の取組が行われている。
- 早期に肥育を開始することにより、肥育期間の短縮を図り、コスト低減・収益性の確保が可能ではないか。

肥育期間の短縮・出荷月齢の早期化に向けた実証の取組

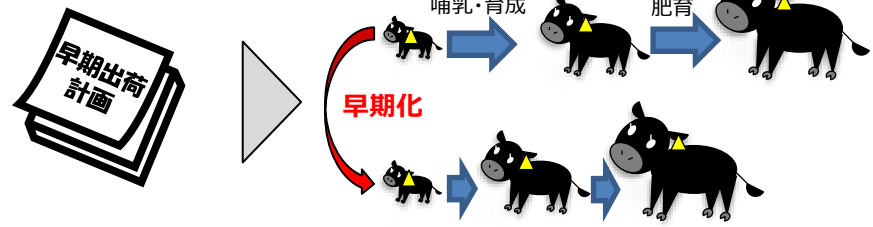


早期出荷計画の策定

- ・子牛の出荷月齢の早期化
- ・肥育牛の出荷月齢の早期化
- ・早期出荷牛肉の販売計画

早期出荷の実証

- ・早期出荷計画に基づく早期出荷の実証
- ・早期出荷を実現するための飼養管理マニュアルの策定 等



早期出荷の収益性(黒毛和種モデル比較)

	早期出荷モデル	通常モデル
肥育開始月齢	8 か月齢	9 か月齢
出荷月齢	26 か月齢	29.5 か月齢
費用 (円/頭) ①	1,105,878	1,201,883
物財費	1,032,110	1,116,847
もと畜費	519,265	554,265
飼料費	439,036	477,499
その他	73,809	85,083
労働費	73,768	85,036
収入 (円/頭) ②	1,160,237	1,252,179
枝肉価格 (円/kg)	2,435.5	2,495.9
枝重 (kg/頭)	476.4	501.7
収益 (円/頭) ① - ②	54,359	50,296
70頭規模		
年間出荷頭数 (頭)	47	41
年間収益 (円)	2,536,764	2,060,899

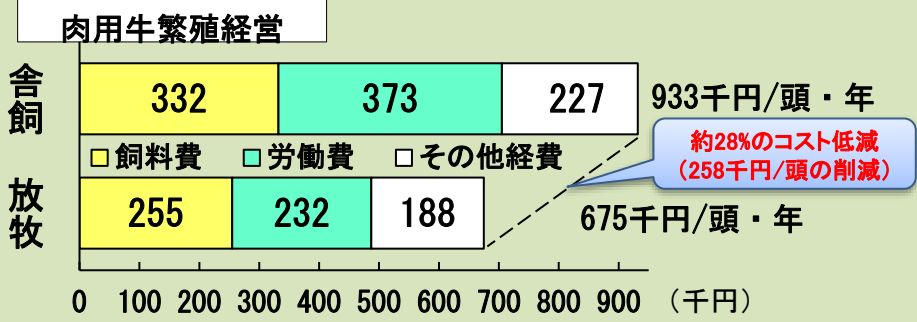
※費用 物財費その他、労働費：(早) R4 生産費をベースに、肥育期間に合わせて圧縮、(通) R4 生産費もと畜費：(早) R5 年度平均から1 か月若齢である影響として3.5万円低下(月齢と価格の相関より推計)(通) R5 年度平均
飼料費：(早、通) 家畜改良センターでの早期出荷に係る研究結果に物価指数の変動を加味
収入 枝肉価格：(早) R5 年度卸売価格(東京市場)の26か月齢の平均+0.5σ、(通) 30か月齢平均
枝肉重量：(早、通) 令和4年度月齢別成績(全国)

生産コスト等への対応(放牧・粗飼料多給)

- 放牧は、飼料生産・給与等の省力化やコスト低減、適度な運動による繁殖成績向上などのメリット。経営内での放牧利用のほか、公共牧場や中山間地域の耕作放棄地等で活用。
- 飼料費削減のため、濃厚飼料の低減が重要。高栄養のため濃厚飼料の置き換えも可能な青刈りとうもろこしの活用が一つの選択肢。最近では、肥育牛での取組例も出てきている。

放牧利用

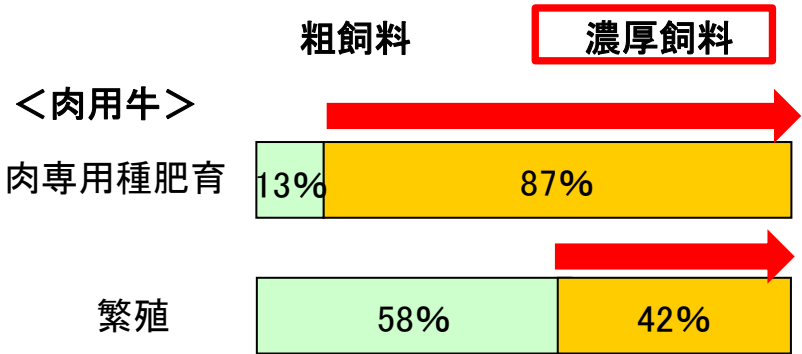
放牧による飼養管理のコスト削減効果の試算



注: 令和4年畜産物生産費(子牛生産費2〜5頭未満規模)による子牛1頭当たりの生産費から試算
＜前提条件＞繁殖雌牛2〜5頭未満規模、放牧期間: 5月〜10月(6か月)

粗飼料多給による飼養

○ 粗飼料と濃厚飼料の割合 (令和4年、TDNベース)



資料: 農林水産省「令和4年畜産物生産費統計(確報)」より試算

長崎県平戸市 石原放牧部会の取組

いきつきちよう

- 平戸市生月町では、従来より共同牧野を中心に放牧を実施。
- 平成24年に畜産農家3戸が放牧部会を設立。耕作放棄地を利用した黒毛和種繁殖雌牛の放牧を開始。
- 耕作放棄地の解消により景観が改善され、周辺地域は観光PRや自動車CM、映画撮影に利用。
- 放牧面積3.7ha、放牧頭数11頭(R5)



鹿児島県鹿屋市 平松畜産の取組

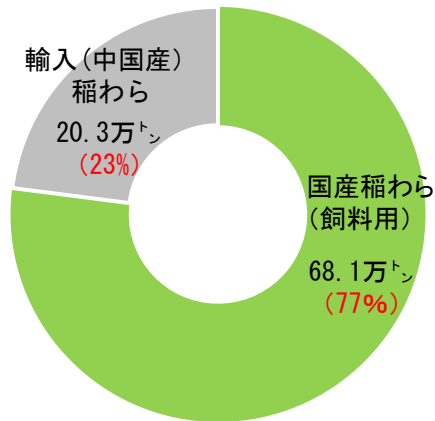
- 和牛約1万5千頭(うち繁殖約4千頭)を飼養するとともに、青刈りとうもろこし160haを栽培。
- 肉用牛肥育において、青刈りとうもろこし主体の発酵TMRを給与。
- 配合飼料総給与量を一定程度抑えつつ、増体重視の肥育経営を実施。



生産コスト等への対応(国産稲わら)

- 稲わらは、国内発生量の1割弱に相当する約70万トンが飼料利用されているものの、約20万トンを中国から輸入。
- 東北・北関東の肉用牛産地では、国産稲わらの利用率が高い一方、中国産稲わらは、南九州等の肉用牛主産地の近隣の港で通関されている状況。
- 国産稲わらの利用拡大を図るためには、輸入品の活用状況等の地域の実情に応じて、地域内での利用率の向上や効率的な流通の促進が必要。

稲わらの自給率(R4年産)



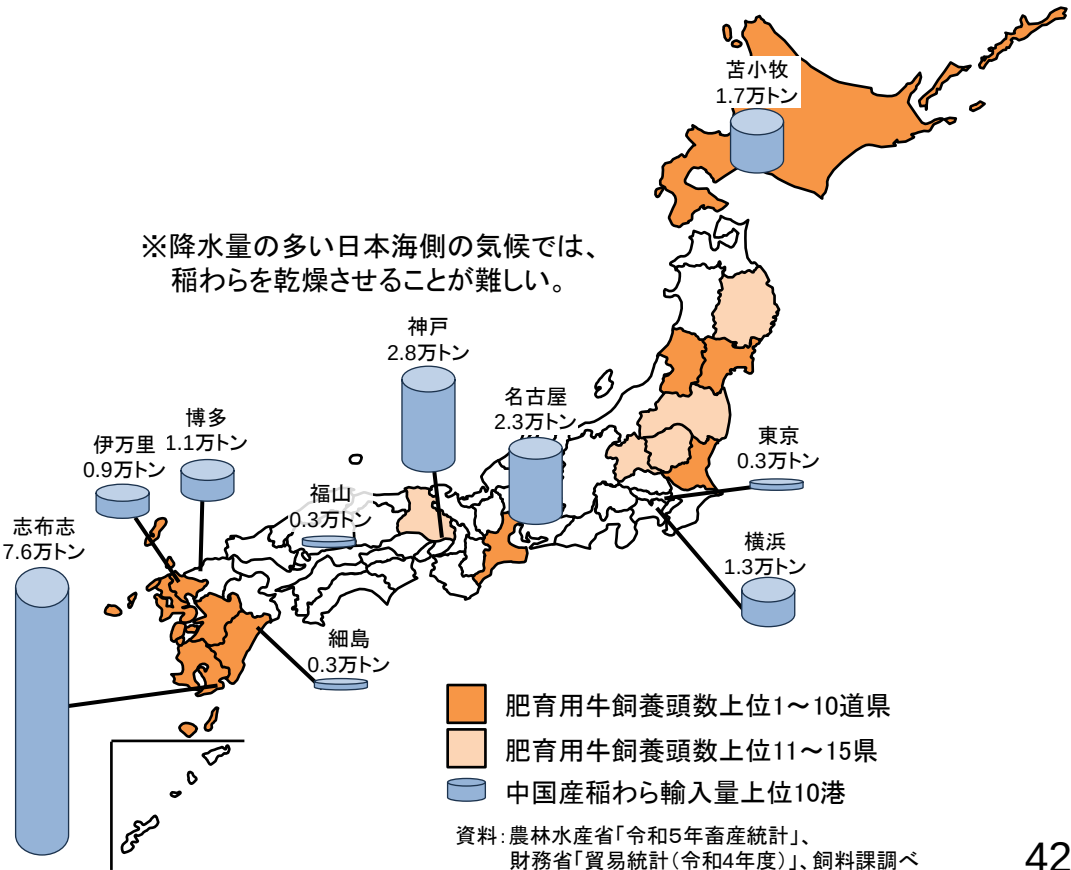
資料:飼料用国産稲わらは飼料課調べ、輸入量は財務省「貿易統計」
(10月～翌年9月までの合計)

中国からの稲わらの輸入量と通関価格

	輸入量(千トン)	通関価格(円/kg)
R2年度	237	33.8
3年度	225	43.4
4年度 (確々報値)	203	63.6
5年度 (確報値)	197	49.3
6年度 (4～6月) (速報値)	49	45.0

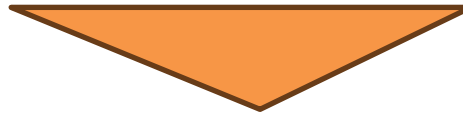
資料:財務省「貿易統計」

肥育用牛飼養頭数の上位15道県 及び 中国産稲わら輸入量の上位10港



③ 経営の体質強化、担い手不足への対応

- 流通飼料費を中心とした生産コストの増加
- 繁殖経営における高齢化・後継者不足の深刻化



- ・育成から肥育までの生産コストの低減に資する早期出荷の本格化
 - ・国産飼料の生産・調達可能量に見合った繁殖経営
 - ・放牧、青刈りとうもろこし、稲わら等国産飼料の利用促進
 - ・キャトルステーション等外部支援組織を活用した労働負担の軽減、地域全体での後継者の確保
 - ・スマート農業技術を活用した生産性向上
- が必要ではないか。

【4. 消費者ニーズ】

消費者ニーズと品種毎の位置づけ

- 消費者ニーズは赤身肉から脂肪交雑の多い霜降り肉まで多様化。
- 消費者の約5割は普段赤身肉を購入しているが、消費者の約6割が価格次第で霜降り肉を購入する意向。
- 黒毛和種、交雑種、乳用種の全体で、多様な消費者ニーズに対応している状況。

国産牛肉に関する意識調査

いつも赤身	普段は赤身 たまに霜降	赤身と霜降 半々	普段は霜降 たまに赤身	いつも霜降	国産牛肉 購入せず
17.6%	31.6%	13.7%	12.3%	5.6%	19.2%

消費者の約5割は普段は赤身を購入

赤身肉より安価でも 霜降り肉は購入しない	値段によっては 霜降り肉を購入する*	値段に関係なく 霜降り肉を購入する
29.1%	59.0%	11.9%

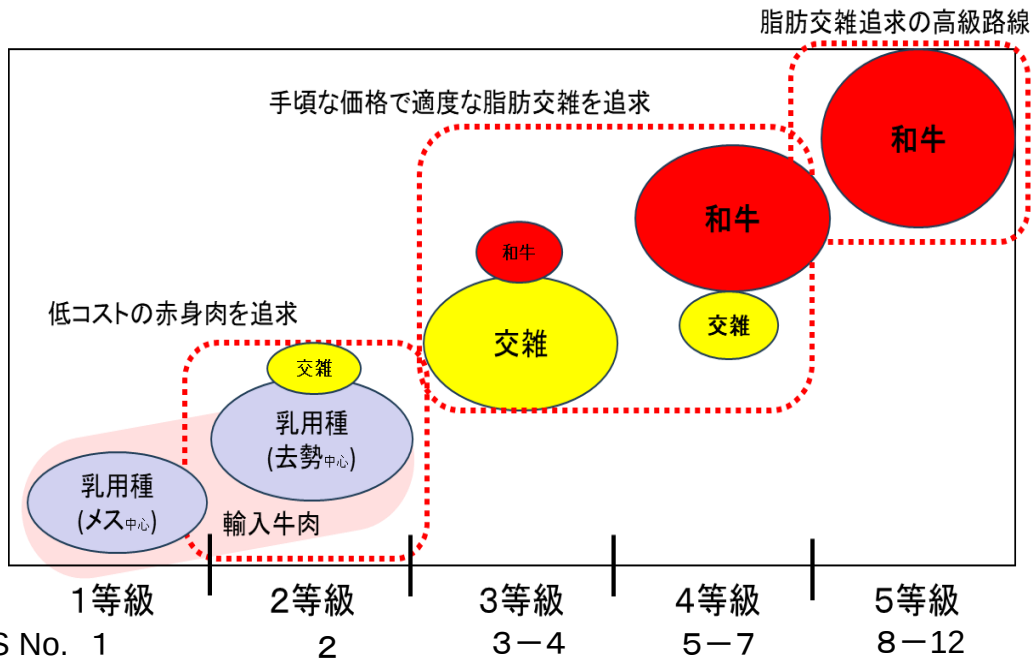
* 赤身肉より2割高程度なら38.5%、3割高程度なら12.5%、5割高程度なら4.8%、2倍高くても3.2%が、赤身肉より霜降り肉を購入。

(注) 消費者が認識している牛肉の赤身肉と霜降り肉

赤身肉:主にBMS NO.3以下、霜降り肉:主にBMS NO.6以上

(資料) 令和5年度「食肉に関する意識調査」、日本食肉消費総合センター調べn=1,800人

品種毎の格付分布(イメージ)



【参考】これまでの取組

- 畜産生産力・生産体制強化対策事業による食味に関連するオレイン酸等を測定する機器、出荷時期の早期化に必要な生体肉質診断機器の導入に対する支援
- 国内外の和牛肉の需要開拓を支援するため、和牛肉の輸出促進に取り組むほか、国内需要を拡大するための、和牛肉の新規需要開拓、消費拡大やインバウンド需要の喚起に対する支援